

編集後記

以前送られてきた日本医師会による「知っておくべき新しい診療理念」を拝見した。このような概念をまとめられた日本医師会生涯教育委員会、学術企画委員会の先生方を中心とした方々には、そのご尽力に敬意を表するものであるが、一方、改めて英語表現に基づいた理念が多いことに驚かされた。

リビングウィル、セカンドオピニオン、EBM(Evidence-based Medicine)、NBM(Narrative-based medicine)、PUS(public understanding of science)、スピリチュアリティなどの医療の倫理や基本的理念をはじめとして、テーラーメイド医療、インフォームド・コンセント、リスクマネジメント、クリニカルパス、クリニカル・クラクシップ等々。社会の「グローバル化」は医療も同様であり、このような社会の変化と理念の国際レベルにおける共有という観点からは英語表現のままその概念を認識し、用いることは必要なことでもあろう。

ここに「インフォームド・コンセント」という言葉を例にあげてみよう。1990年には日本医師会の生命倫理想談会は「説明と同意」と訳し、その重要性が強調されたが、その後1995年の旧厚生省の「インフォームド・コンセント」の在り方に関する検討会でさらに色々と議論がなされる中で、さらにその訳語についても、さまざまな提案がなされた。しかしながら、いずれか一つの訳語に絞ることは困難となり、あえて訳語を用いるよりは原語のまま「インフォームド・コンセント」として用いることとなったようである。もちろん世界の先進各国でこの言葉は用いられ、その重要性と概念は認識されているとはいえ、その考え方や運用にはそれぞれ国によってある程度の違いは存在しているようである。しかしいずれにしても、そこには世界共通のグローバル化した概念、理念と、それを表現する共通の「informed consent」という言語が存在している。

上記のグローバル化に根差した世界共通の医療概念を世界共通の言語によって表現するという国際化は、私共が原著でも症例報告でも多く international journal に投稿する動機とも無縁でないような気がする。当然立派な成果は、世界の多くの人々に評価され、認知され、また引用されることは研究者、臨床医を問わず重要なことであり、また高く評価されるべきことである。事実多くの日本の外科医も、私自身を含めて international journal に投稿することを目指して努力を続けている。

一方、医学や医療の理念や概念にもグローバルな視点が重要であると同時に、わが国の歴史や環境、そして社会において特異的な視点も、もっとあって良いのではないかとも思う。そのような視点を歴史の中から、そして現代日本社会の中から見出し、「日本語でしか」表現できない医学理念もあっておかしくない。初等教育において早期の英語教育の導入が推進されると同時に日本語教育の重要性が強調される今日、このことを今一度見直してみたい。はるか以前に書かれた日本語で整然かつ詳細に書かれたおびただしい頁数から成る学位論文の数々を目にし、驚嘆した記憶がある。邦文誌も「邦文として」出す意義を見出してゆくことは今後重要であると思う。日本消化器外科学会雑誌の編集に携わりながらそのようなことを考えている。(桑野 博行)